日本
ハンザキ研究所ニュース 2007(10)：通巻２１号
発　行　2007.10.31
〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292
TEL/FAX (079)679-2939
E-mail: J-hanken @sasayuri-net.jp
日本ハンザキ研究所　　栃本　武良

オオサンショウウオの会 in 三重（赤目）

第４回目のオオサンショウウオの会が三重県伊賀市・名張市などで10月７・８日に開催されました。途中で参加者数が少ないとのことで心配されましたが、100 名余の参加に加えて17題もの発表があり、時間の不足が感じられたほどの盛会となりました。今回の事例などの発表の中では、カエル・ツボカビ症についての話題が注目されました。また、来年は国際的な「カエル年」として、世界的にもその絶滅が危惧されている両生類を守るための国際的なキャンペーンが実施されることになったそうです。たかがカエルと馬鹿にする人が多いようですが、カエルは幼生のオタマジャクシの時代から親ガエルに至るまで生態系の中で重要な役目を担っているのす。

カエル類が減少してヘビが減ってきているという報告があります。ヘビが減るのは大歓迎だという人は多いことでしょう。その結果ノネズミが増えて穀物を食い荒らすという被害が出ている所が有るそうです。オタマジャクシの時代には水生昆虫のタガメやヤゴ、鳥類など多くの動物の餌となり、親ガエルはヘビを始めとしてハンザキや多くの鳥類の胃袋を満たしているのです。

事例発表の中で日本サンショウウオセンターの石下さんの「入れ歯をされたハンザキ」の話はユニークなものでした。標本が同センターに展示されていたので写真１で紹介しますが、入れ歯というよりも“入れ下顎骨”でしょうか。歯の方は数百本もあり、小さな物ですので中々入れるのは難しい事になるでしょう。

２日目の現地視察では、雨の中（４会の内３回も）となりましたが、滝川における試みや、水資源機構・川上ダム建設事務所の早々としたハンザキ飼育実験施設などで色々な試みを解説して頂きました。川上ダムはその必要性が議論されている所ですが、もしもダムが造られないことになったならば、オオサンショウウオの一大聖地になることでしょう。ダムの堤体が構築される上下流には数百匹のハンザキが棲息していることが確認されているそうです。飼育下で橙色にくっきりとしたホクロの持ち主の５才の個体（写真２）を見せていただきましたが、川上川のシンボルとして大きく成長してほしいものです。

キイロスズメバチ

膜翅目スズメバチ科には何種類もの大型のハチが知られていますが、秋になると毎年のように騒がれるのはスズメバチの被害としてのみで、種名はあまり報道される事がありません。キイロスズメバチは身近な人家の軒下や橋の下など雨が降りかからない場所に巣を作るようです。今年のハンザキ研では、正にスズメバチ・フィーバーでした。

① 初夏に、窓を開放していたらスズメバチが次から次に侵入してきました。厄介者が近くに引っ越してきたなと思いながら、「ナイス蚊ッチ」という商品名のラケット型の電撃具でたたき落としていました。もっとも此の器具は蚊をやっつける物で、大きなスズメバチは落とされてもしばらくすると気絶から覚めて飛び去ってしまいます。一体どこに巣を造っているのかなと思っていましたが、窓の外に大きく育ったキリの木を見上げていた時に、その上の天井の空気抜きの格子の隙間から出入りしているハチを見つけたのです。退治するには屋根裏にもぐり込んで殺虫剤で対決しなければなりません。ペットボトルにハチ蜜と酒を入れてそばにおけば、誘われてハチが入って駆除出来るというアドバイスを受けて、早速トラップを作りました。数日で数十匹を捕獲できましたが、出入りは盛んで相変わらず侵入してきます（カルピスの空き容器も効果的だそうです）。家の側を通る時に見上げると数匹が格子の隙間からこちらをジッと見つめているように見えます。10月のある日に、ふと見上げると格子が静まっていました。以後、全くハチの姿を見ません。逃散したのでしょうか？、近々に天井裏に潜ってみようと考えているのですが、中々実現しません。

② 9月のハンザキ繁殖パーティーのメンバーをチェックするために近道ルートを作ろうとアルミ梯子を川岸の藪に下ろして、下りようとしたら横でハチがホバリングしているのです。スズメバチのホバリングは巣に近づく害敵への警戒行動です。あわてて逃げてから梯子の横の橋の下を覗くとバレーボール位の巣が見えました。夜に出入口に栓をして捕獲をと思って行くと巣の外側に多くの働きバチが止まっていたのでやめにしました。灯油をかけると逃げるとのことですが、今年はいつまで活動するのか観察することにしました。

③ スズメバチ駆除には姫路市は3万円の補助ですが、生野地域では数千円だとのことではありますが、達人はあちこちで駆除をしているようです。10月に駆除した2巣を届けていただきました。袋の中には成虫や幼虫・蛹などが多数ありましたが、7段の巣を一つずつチェックしてみたところ、成虫と蛹・幼虫がそれぞれ約1500匹を数えました。現場で死んだものも含めれば、直径50㌢程の巣に5000匹以上ハチがいたことになります。さすがのスズメバチですが3000匹の死体の山を積み上げてみると何とも言えない気分になります。貴重な標本として整理しましたが、これら数千匹のスズメバチに襲われたらかなわんなとも思います。人と害虫？との付き合い方はいかにしたらいいのでしょうか？ヒトの利益になれば全てが正義とされてきた人間本位の今の地球では、ヒトは反自然な存在になっているのです。

イベント「黒川小・中学校同窓会」

旧の生野町立黒川小・中学校の施設にハンザキ研究所の看板を掲げて2年余となりました。中学は昭和60年に、小学校は平成4年に閉校となっています。そして今年の4月からは義務教育の子供は0となりました。現在の校舎は、私がオオサンショウウオの調査を開始した昭和50年に新築されています。鉄筋コンクリートの建物はすぐにでも学校を再開することができそうな良い状況ではありますが、子供の姿はありません。生野ダムで分断された黒川地区は6集落32戸、80人程の限界を過ぎた集落として存在しているのです。通学の公平さを考えて集落の中間地点である現在地に学校と公民館も建てられたので、周辺には人家はなく素ばらしい自然環境が維持されています。

地区の活性化を模索するなかで、イベント・黒川小・中学校同窓会が計画されました。純然たる同窓会ということではなく、村おこしの一環としての事業ということです。まだ家や田畑を残したまま村を出ている人や都会での生活を求めて村を出た子供や孫の世代などへ、故郷への思いをかき立てることで、なんとか次世代への存続を考えていこうということです。卒業者名簿などから音信をたぐり、参加を呼びかけてという手応えの不明な状況ではあったようですが、10月21日の会には70名程の参加がありました。会では井上朝来市長、桐山教育長（旧・生野町長）などの出席の元に20名余の旧・教職員の参加もありで大変な賑わい方でした。数十本の“ようこそお帰り黒川へ”と“あんこミュージアム”の幟旗が立て並べられて、無関係の通行人？まで入場して来るほどでした。

私も「廃校の活用とオオサンショウウオ」の講演をさせて頂きましたが、身近な存在であるオオサンショウウオの存在意義をどのくらい訴えることができたのかなと思っていましたが後日、当日に参加した婦人が両親を連れて訪れてくれました。それはオオサンショウウオの卵の話に興味を持たれて見に来られたとのことでした。しかし、卵は既に全て孵化してしまい、オタマジャクシのような幼生になってしまっていました。それでもとても喜んでいただけました。このような反響が幾つかはあって、多少なりともお役にたったのではないのかなと思っているところです。

平成4年3月に刊行された黒川小学校閉校記念誌「くろがわ」を頂いたのですが、その中には昭和37年卒業の田畑和広さんの「あんこう」という一文に目が止まりました。たらいに入れられた3匹のオオサンショウウオの写真と共にみそ汁にして食べたり尾などが軒先に干されていて薬として使われていたことが書かれていました。昭和26年に天然記念物として指定されるまでは、かなり食べられていたことがわかります。また、最後の在校生の竹村国宏君4年生の作文には、私との出合いが綴られていて懐かしく思い出させられました。生き物好きな国宏君はそれ以来ずっと年賀状をくれたり、水族館に訪ねてきてくれていました。黒川の次の時代を背負っていかなくてはならない彼らの頑張りにも期待したい所です。

オオサンショウウオ保護センター（仮称）

ハンザキ研ニュースのNo.1で廃校の活用で夢のような「あさごエコ・ミュージアム」構想（案）を書きました。当時はこんなことが出来るのではないかといった軽い考えでしかなかったのですが，それから1年10か月が過ぎました。数々の幸運にも恵まれつつハンザキ研の整備が考えていた以上の順調さで進んできました。今年の3月に竣工した河川の観察ステーションに続いて、今度は学校のプールを改造してのオオサンショウウオ保護収容飼育施設の工事が開始されたのです。

当所から10㌔ほど下流の生野ダム下流域で道路の拡幅工事に伴い河川（市川本流）の付け替え工事が平成21年度にかけて計画されていたのです。ここは、市川がダムによって分断されてオオサンショウウオが多数生息していることが推測されていました。平成13年から姫路市立水族館では、餌付けされている本種に注目して年に1回の定期的な調査を実施していたのです（ハンザキ研ニュースNo.2参照）が、兵庫県自然保護協会のメンバーも同様の考えで調査に入っていました。この2組の調査でマイクロチップが挿入されたのは33＋41の合計74個体になっていました。兵庫県八鹿土木事務所朝来事業所では工事に先立って昨年9月と本年6月に事前調査を行いました。昨年の3日間の調査では80個体を記録しています。ただし、これは工事予定区間約 500㍍を含む上下流3㌔の範囲での結果です。

80個体の中には水族館で登録した5個体と自然保護協会の11個体が含まれています。つまり64個体が新しく登録されたことになります。合計で 138個体の登録です。さらに、今年の6月の第2回調査で82個体が記録されて、再捕されたものを除くと52個体が新規登録で合計 190個体が登録されました。これらの状況から多数の未登録個体の存在も考えられ工事期間中はオオサンショウウオを捕獲して人の管理下に収容する事になったのです。

プールは河川の水をくみ上げて滅菌装置によって子供たちに使われていたのです。ポンプは十数年の時間で錆びついて動きませんし，プールは使うときだけポンプアップする構造でしたので，生き物を常時収容する飼育には適していませんでした。新たに河川へ集水槽を設置して2台のポンプで河川水をくみ上げることになりました。25㍍プールは幅が6㍍でしたが，その半分を5ブロックに区切ります。これはオオサンショウウオの大きさ別に収容しないと共食いされてしまうからです。水深1㍍のプールに半分の深さの水槽が作られ側面に覗き窓も付けられることになりました。

滅菌室も整備され、水槽台が設置され卵や幼生の収容にも備えます。河川工事は12月からの予定ですが、蛇籠（金網の袋に石を詰め込んだもの）や木工沈床（丸太を河底に打ち込んで岸を補強するもの）などオオサンショウウオが隠れ家として利用しているだろう構造物が多数ありますので，区間を区切って水をかい出して隠れている本種の救出に努めることになっています。全長30㌢以下の個体は夜間調査をしても殆ど姿を見せません。彼らは危険な河底の表面には出てこないで礫間に身を潜めては石裏の水生昆虫等を捕食していると考えられます。

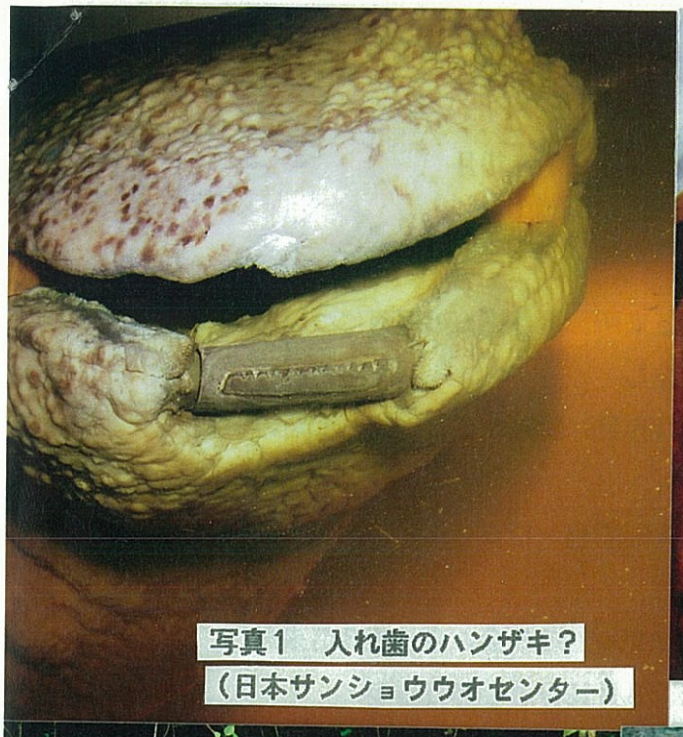

写真1　入れ歯のハンザキ？
（日本サンショウウオセンター）

写真2　突然に色変わりしたハンザキ（川上ダム建設事務所）

写真3　瀬戸市蛇ケ洞川の主？捕獲大作戦
（カニ籠のセット）

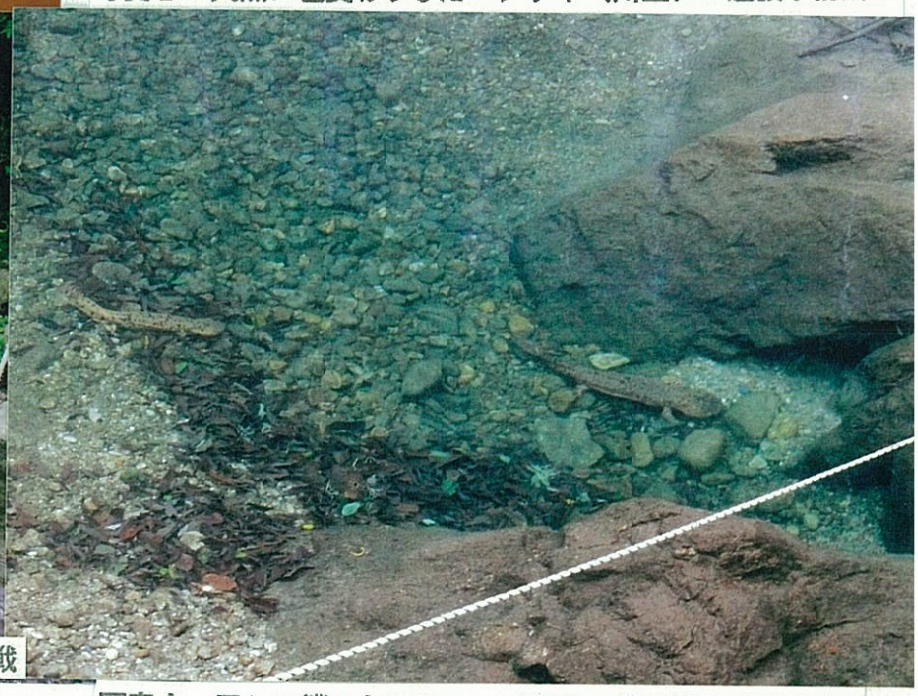

写真4　アンコ淵のセレモニー（黒主の後を追う♂？♀？）

写真5　キイロスズメバチの山盛り（3000匹を数えた）

写真6　イベント「同窓会」会場

ハンザキ研日誌　２００７年10月

２日：調査（GS-248）～５日まで
：兵庫県姫路利水事務所・津川所長他２名来所、神谷ダムの運用について
３日：簾野の人工巣穴の今期繁殖最終確認、無し
７日：第４回オオサンショウウオの会in三重（赤目）開催～８日、約 100名の参加、17題発表、第２代の会長を受ける
９日：瀬戸市蛇ケ洞川オオサンショウウオ第４回調査～12日
１３日：調査（GS-249）～23日まで
１４日：姫路工業大学（現・兵庫県立大学）ワンゲル部ＯＢ会・会長他３名来所
：アンコ淵に潜水し黒主が守る卵の確認、９月10日と産卵日推定
１５日：黒川地域活性化協議会、当所にて開催
１７日：朝来市中学校理科教員研究会11名来所
：駆除されたキイロスズメバチの巣を受贈、約3000匹の成虫と蛹・幼虫を数える
１９日：市川（竹原野地区）オオサンショウウオ対策検討委員会開催・当所のプールをハンザキ収容施設として整備することとなる
：県立人と自然の博物館・田中哲夫博士来所
２０日：オオサンショウウオの卵の孵化が始まる
２１日：黒川小・中学校の同窓会、約70名参加
２６日：調査（GS-250）～11月８日まで
２７日：ハンザキ保護施設のコンクリート型枠が取れる
２８日：観察ステーションにセキショウを植え込む、一部シカが食むも旨くないようだ
２９日：ハンザキ研のＮＰＯ化準備会議（現在はNPO 地域再生研究センターの傘下）
３０日：姫路市立水族館オオサンショウウオ調査に（竹田・多田両氏）

今月は３回21日間の出勤？で，来訪者を含めて総計 245人の利用がありました。
2005年８月の開所以来では66回 423日，総計2,592 人ということになります。

ハンザキ所長のツブヤ記録

今月もあっと言う間に過ぎ去ってしまい標高 470㍍ほどの研究所は冷え込みが強くなってきました。夜間調査もしばらく御無沙汰していますが、目下のところハンザキ研の整備を最優先の課題として進めています。それでもついつい豊かな自然の構成員の誘惑に負けてよそ見をしてしまいます。春先の黄色い花々から白い花に季節が進み赤い花が目立ち、更に秋には青色が目につきだします。そして紅葉とともにシカの哀愁を帯びた恋の叫びが響いてきます。“奥山にモミジ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき・・・”